

# アフリカの人々と名付け 40

## 長男と末男、長子と末子

小馬 徹

小川了によれば、イスラム教徒である西アフリカのフルベ人の間では今も伝統的な生まれ順による名前が依然として最も大切である。それは、この名前が牛を中心とする家畜の伝統的な相続法に結び付いているからだ〔小川了『サヘルに暮らす』、1987〕。小川は、さらにこの命名法に彼らの人間観を読み取ろうとする〔「固有名詞と社会関係（西アフリカ）」、『現代のエスプリ別冊一言語人類学』、1984〕。

### フルベの長男、次男、三男

フルベでは、次男はSambaという名前を与えられる。Sambaは様々な説話の中で主役を演じ、賢く勇気があり、フルベ人の理想とする美德を備えた人物として描かれている。

ところが、長男に与えられるHammadi（別名Dikko）は、対照的に、粗忽者の代名詞となっている。誰か長男でない者がへまをすれば、「お前は本当にHammadiだなあ」といって宥める。他方、長男がへまを仕出かすと、「Hammadiだから仕方がない」と揶揄するのだ。

三男を指すDembaという名前には、次のようにずる賢さや陰険さ、あるいは貪欲さの語感が潜んでいる。フルベの説話では、知恵者である兎と並んで、陰謀と奸計の末に兎に破れ去るハイエナが頻りに登場する。そして、説話中では大概ハイエナはハイエナでなく、Dembaの名で呼ばれるのである〔小川、前掲書〕。

### 歴史伝承と生まれ順

フルベの長男、次男、三男の寓話は歴史伝承の中で一層重要な意味を持つ。牧畜民フルベは、他民族から編入した「専門職人カースト」の人々にあらゆる工芸技術を依存する。その中で

も最も重要なのは、牛乳とその加工品を入れる容器を作る木地師である。伝統的に無文字社会であったフルベでは、歴史を伝承する語り部もまた木地師と並んで重要な存在であった。

三者は一体をなして相互に依存し合っていて、他のどの集団が欠けても生きていけないと言われる。歴史伝承はその祖先を三人の兄弟として描いている。つまり、木地師を長男、フルベを次男、語り部を三男の子孫として。

小川は長男よりも次男を尊敬するフルベの人間観の背後に、約一世紀前にイスラム化する以前の相続慣行の影を見る。この慣行では、父親は存命中に雌牛を次男に一頭、三男と四男には共同で一頭を与え、三男と四男は雌牛の再生産過程で独自の雌牛を得る一五男と六男以下も同様。だが長男は一頭の牛も与えられず、父親の死後漸く残された牛を全て相続するのだ。

この相続慣行には、父親と長男の間の緊張をはらんだ尊敬＝忌避関係が窺える。次男は、父親の存命中に得た雌牛を自分の才覚一つで増殖させることができる。一方、三男以下は次男のように一人前の人格を認められておらず、次男は羨望される。そうした父親との距離感に繋がる兄弟の生まれ順への社会的評価が、先に見た長男、次男、三男の典型的な性格概念に投射されている。これは、「もっとも日常的な言語の形としての固有名詞もその背後にある人間の関係を探ると意外に複雑な社会の一面がみえるという例」だ、と小川は言う〔小川、前掲書〕。

### キプシギスの生まれ順名

この観点から、やはり伝統的には牛牧民であった西南ケニアのキプシギスの生まれ順名を見てみよう。彼らの間には、長男を指すTaita

と末男を指す Towet という名称だけが存在する。複婚制で、しかも妻単位の家が強い自立性を持つ「家財産制度」を特徴とするキプシギス社会では、長子・末子は、日常生活では妻から見た概念として用いられることが多い。

無論長男については、同時に「夫の家」(kapchi) 全体、つまり夫の視点からもその地位が重要である。その場合、「夫の家」の来るべき代表者の地位が問題なのであり、それぞれの妻の長男の実際の年齢に関わりなく、最初の妻の長男が「夫の家」の長男とされるのである。

この意味での長男は、父親の埋葬に責任を持つ存在である。これに対して、それぞれの妻の埋葬には各末男が責任を負う。「家財産制度」と共に、新居制(neolocality)という結婚後の居住形態とそれゆえに息子たちが次々に遠方へ分住して行く伝統を持っていたキプシギスにとっては、長男と末男の存在は特に重要だったのだ。しかも、キプシギスの父親は息子に決して財産を生前分与しない。これが、生まれ順に基づく兄弟各々の複雑な性格付けとそれを表象する一貫した名称系の不在を一面では説明しよう。

### 長子を得て親になる

さらに、Taita と Towet が性に関係なく、長子と末子の意味で用いられる場合が少なからずある。特に、Taita にはその傾向が強い。

さて、前回に紹介したように、フルベでも長女は、性を無視して、長男と同じ Dikko という名前が与えられる例外的な存在であった。実は、前回紹介した八丈島の生まれ順名にも、構造的にはこれと全く同様の事情があることが、幾つかの記録からは見える。

八丈島では、長男はタロウ(太郎)という生まれ順名を与えられたが、トウスとも呼ばれた。ところが、江戸時代の記録の幾つかには、生まれ順名ではニョゴと呼ばれた長女が、やはりトウスとも呼ばれる事が記載されている。そればかりか、トウスが男女ともに用いられると明言している記録もある。鈴木棠三は、高名な太田

南畝の『一話一言』にも引用されている『八丈方言通俗志』が「トウスとは格別愛子に用唱へ候」と書き記しているのに注目して、「男女に関わりなく、一種の愛称と考えられる」と述べた[『言葉と名前』、1992]。鈴木のこの見解を更に一歩進めて言えば、江戸時代の八丈島では長子の誕生が特別な意味を持ち、それゆえに格別に親の愛情に強く恵まれた存在であったのだ。かくして、長子は他の子とは異なる。

西アフリカのフルベ、東アフリカのキプシギス、並びに徳川時代の八丈島という、時間的にも空間的に隔たった社会の比較は、或る事を教えてくれる。つまり、時代と地域を超えて見られるこうした慣行の背景には、長子の誕生によって初めて親という社会的地位を獲得できる事実があり、それに対して伝統社会が与えて来た重い意味付けを見出すことができるのである。

### 正式名と通り名

さて上に見たように、キプシギスで長男或いは長子、ならびに末男或いは末子を意味する生まれ順名である Taita と Towet の語義と用法は重層的であり、実際にそれらが用いられる文脈によって異なっている。調査をする場合、こうした事実注意到注意を払わなければならない。

ただし、キプシギスの場合、フルベとは異なって、Taita や Towet も一種の通り名である。この点に限れば、むしろ徳川時代の八丈島の事例に似ている。とは言え、八丈島のように正式名が忘れられて用いられない事実はない。誰もがそれ以外の複数の幼児名を持つ。Taita や Towet が正式名化するのは、実はむしろ例外的なのである。

鈴木は八丈島が外部から隔絶していた事に正式名が忘却される条件を見た[鈴木、前掲書]。だが東部アフリカは、小さな氏族を横断して形成される年齢組が発達した独特の地域として知られる。キプシギスもナンディ型の年齢組によって広大な民族社会を実現してきたのである。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)